

絵本作家の個展 たなか踏基

六月二十六日(日)、信州坂北にアトリ工を構える旧知友人の絵本作家の原画・CG版画の個展を観に、家内と恵比寿に出掛けた。案内状に会場は、恵比寿三越一階アトリウムとあったので、三越百貨店だと思った。期間は六月二十四日～三十日である。文芸社より上梓の拙著「奇妙な喫茶店」では、信州での販売や広報面で世話になった一人である。

JR湘南ラインを利用した午前直通電車、恵比寿駅下車までは順調だった。乗車位置が最後尾だったためか、下車以後の行動で少し迷ってしまった。東口動く舗道(通称恵比寿スカイウォーク)が見当たらないのである。一度、恵比寿三越店の開業時に行った経験があるという家内は「直ぐわかるわよ。」と勝手気ままに歩き出す無神経ぶり。些か呆れながら付いていったが、心配になり開店準備中の若い女性に東口動く舗道の場所を尋ねた。

「何処へ行かれるのですか？」  
「恵比寿ガーデンプレイス内の三越です。」  
と応えると、もう一度駅に戻って下さいとの返事。別に急ぐことも無いのだが、動く舗道を見付けるまでに、二十分程費やした。

無事恵比寿スカイウォークの入口に着いた。何のことはない。舗道といっても、駅の高所から移動するゴムベルトである。言わば、エスカレーター(の駆動板が繋がっていて、唯水平に移動するだけの代物である。最近この種の仕掛は方々で見られる。東京駅、京葉線誘導路、東京ビックサイト展示場、成田国際空港にも同じものがある。

五、六分で、恵比寿ガーデンプレイスに着いた。恵比寿麦酒工場跡地に一九八五年以降に建設された複合商業施設である。全体景観は、昔のイメージそのままに、煉瓦造り工場を連想させる。在職の折、札幌ビールの工場見学に仲間と来たことを思い出していた。同じ煉瓦色が基調の落ち着いた恵比寿三越店は、老舗の日本橋三越と雰囲気異なり、若者向きにお洒落な店であった。二階に繋がるエスカレーター広場に展示場のアトリウムがあり、絵とCG版画が沢山飾ってあった。髭面の絵本作家の友の顔があった。先客は、美校時代の友人一家であった。前日電話で、午前中に訪問予定を伝えてあったが、時間は昼近くなった。

武蔵野美術大学出身の友は、高校時代と喋り方も顔も全く変わらない。髭をたくわえた風貌はすっかり画伯の雰囲気である。目下、信州坂北村と東京阿佐ヶ谷の二つのアトリ工を往復し、制作に励んでいる。初めて会って以来、親交は半世紀に及ぶ。当時、私は松本測候所近くの西町というところに住んでおり、友は直ぐ近くの澤村に下宿していた。その関係で、松本の自宅に良く遊びに来るようになった。友の実家は、東筑摩郡坂北村である。女手一つで苦労して育てるポラ化粧品(のセー

ルズレディ)が母親であった。私も友も、母親は既に他界しているが、同じ休学者同志で馬が合った。高校卒業は私の方が早く、二年先に卒業した。極最近昔の同人誌「えぞうぶ(リイソップの意)」が、私の手元に戻ってきた。前述の拙著が縁となつて、同人の一人が自宅に保存していた冊子を、送ってくれたからである。この同人誌「えぞうぶ」の表紙絵は、この友人が当時描いたものである。できれば、昔の六人のメンバー+ で復刊したいと個人的に考えている。昔詩人の友も賛同した。友

が絵本を数冊出版したのを知っていた。共著もあれば単独出版のものまである。ジャンルこそ違いが、出版に関しては、友は私の先輩である。展示場に、売約済みの赤ポツチの数が少なく寂しかったので、家内のお気に入り原画と、CG版画二枚購入した。最近、高校の同窓会人脈で絵を販売しているといっていた。販売から製造まで手がける画家というよりは、営業マンだといって屈託なく笑った。自ら著名先輩と一緒に撮った写真やら、新聞雑誌の記事をみせてくれた。資料の中に、私が見たいと欲したものが二つあった。一つは、婦人公論昭和六十二年「昔のなかま」という、同窓生交歓風景写真であり、もう一つは、竹橋会館の映画監督熊井啓氏のパーティの写真であった。前者写真記事に、高校の美術倶楽部(アカシヤ会と呼称)の八人の面々が写っており、中に昨年三月逝去の芸大卒の彫刻家と細君、熊井夫人と絵本作家の友も一緒に写っていた。婦人公論編集部との段取・文書共に熊井夫人であった。後者は、熊井啓監督紫綬褒章受賞と同夫人出版記念パーティである。胸に主賓の赤いバラを付けた二人に並び、絵本作家の友が写っていた。

愛猫家を自ら自認し、猫のエッセイを執筆する元我が西町隣人熊井夫人に、安曇野舞台の次期小説の序文をお願いしようと思つたからである。版元も決まらないのに、早計かもしれないが、昨年逝去の彫刻家をモデルで執筆した百二十枚、負けず劣らずの猫の物語、「奇妙な猫たち」の題名にしようと決めているからである。熊井夫人と親交のある絵本作家の友も賛同してくれた。

了